



日本政府から寄贈された寮「ジャパン・ハウス」の前で。中列左端が筆者

彼の安否が気遣われる。

## UWCで学んだこと

卒業後一四年を経たいま、UWCで学んだと感じることが二つある。一つは、理想を持ち、その実現に向かって行動する、ということだ。UWCに集まる学生は若く世間知らずだったが、自分たちで世の中をつくっていくという無邪気なエネルギーに満ちていた。

普通の日本の冷めた高校生であった私も、すぐに影響され、毎晩のように熱く語り合うようになった。

そして卒業時、私は日本に帰って医者になることに決めた。二年間、UWCで友人たちと、自分たちはどんな人間になるべきか、自分たちはどんな貢献ができるか、毎日話し合ってきた結論だった。医者になれば、途上国の役に立つ仕事もできるだろうという、いま思うと単純すぎる動機もあった。

もう一つは、度胸である。人の見る目を恐れず、自分の心に正直に悔いがないよう行動する。言葉はたどたどしくても、相手の目を見て堂々と話しかけ、懐に入ってしまったら国籍も民族も関係なく心は通じる。どんなに変な環境でも、とりあえず飛び込んでしまえば、苦労はするものの何とかなる。これらすべてをひっくり返してここでは度胸と呼びたい。この種の度胸を育むにはUWCは素晴らしい環境であり、これはその後の人生において大いに役に立っている。

## HIV感染症の医師になって

私は現在、葉書エイズでHIVに感染した血友病の方々の救済のために設立された、国立のHIV感染症のセンター病院で働いている。以前は死に至る病であったHIV感染症は、いまや慢性疾患に近いコントロール可能な病気になりつつある。しかしながら、目を

世界に広げると、三〇〇万人以上の感染者があり、毎年二〇〇万人近い方が亡くなっている。サハラ以南のアフリカでは、国民の三割以上が感染者、という国も多い。日本は非常に医療の質が高く、またアジアで最初に新しい治療薬が使用できる国であるため、貢献できることが数多くある。

医師という仕事は想像していたよりもとても地道で、人間くさいものであったが、現在の仕事は、私がUWC時代に思い描いていたものに近く、多忙ではあるがやりがいを感じる充実した日々を過ごしている。

最後に、奨学生時代に米国の大学に公衆衛生を学びに留学したときのことに一言ふれた。留学前は漠然とUWCと同じような環境を想像していたが、そこではUWCのように肌の色や民族に関係なく肩を組んで語り合う姿はまれで、国籍ごと、母国語ごとにモザイクのように色分けされる世界があった。高校生という感受性豊かな時期にUWCの小さなキャンパスで寮生活を送り、どの国の友人とも分け隔てなく付き合えたことは貴重なことだったとあらためて感じた。UWCでの二年間は私の人生を決めた。この素晴らしい機会をくださったUWC日本協会やスポンサー企業の方々に感謝申しあげるとともに、今後多くの日本の若者たちにこのようなチャンスが与えられることを願ってやまない。

# 体当たりで学んだ「度胸」

国立国際医療研究センター  
エイズ治療・研究開発センター医師  
西島 健  
にしじま たけし



● ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四五三名の卒業生を輩出している。

一九九五―一九九七年UWCピアソンカレッジ(カナダ)留学。筑波大学医学専門学群卒業。長野県佐久総合病院研修医・総合診療科を経て現所属。

## ❖ ふとしたきっかけで人生が変わった

一九九五年の春、学校に貼ってあった一枚のプリントが、県立高校の一年生だった私の人生を変えた。二年間、世界中の高校生とともに学ぶ国際学校、しかも学費は全額奨学金で賄われる。それまで海外に出たことは全くなく、英語の成績も悪かった私は、英語の面接ではYesかNoしか言えなかったが、何とか合格し、カナダはバンクーバーアイランドの風光明媚な入り江と船着き場のある小さな全寮制の国際学校、UWCピアソンカレッジで二年間を過ごすこととなった。

## ❖ 無我夢中だった二年間

在学中はとにかく英語で苦勞した。初めは

名前を聞かれてもさっぱりわからず、恥をかいたり、惨めな思いをしたりしたことも数え切れないほどあった。そのおかげで度胸だけはついた。育った文化が違うのだから、アウソンの呼吸が通用するわけではない。困った顔をしていれば誰かしらが助けてくれた日本とは違い、ここでは、自分で考え、動き、話し、主張していかないと、誰も聞いてはくれないし、助けてはくれない。日本語訛りの発音など、気にする暇はなかった。

少しずつ英語が聞き取れるようになって、次はカルチャーショックが襲ってきた。「食事中は黙って食べる」と厳格な父にしつづけた私に、「カナダ人のルームメイトは、「同じ食卓を囲んでいて会話をしないのは、相手に興味がないことを意味してとても失礼だ」と論じた。拜礼をするイスラム教徒の姿も、

ジャマイカ人のつけていた鼻が痛むほどに強い香水も、すべてが刺激的だった。何しろ八〇カ国から来た二〇〇人の学生が、寝食を共にするのだ。毎日がまさに文字どおり、国際交流であった。ずいぶんと勉強もしたが、結局、友人やこの混沌とした環境から学んだことの方がはるかに多かったと思う。

## ❖ 途上国にかかわる仕事を志す

私が将来途上国にかかわる仕事がしたい、と思うきっかけをつくったのが、国連難民の資格で入学したスーダンの友人である。いつも陽気に笑っていた彼は、夏休みに帰国しようとして、スーダンの国境で反政府側に属していたため入国を拒否された。「大学を卒業したら帰国して一兵士になって戦う」と、ふと彼が漏らした言葉は、平和な日本で生まれ育った私にとっては、あまりに衝撃が強く、いまでも忘れることができない。彼の消息は大学卒業後に途絶えた。スーダンの内戦は二〇〇五年に終結したが、ダルフルにおける紛争など、その後も情勢は不安定なようだ。